
.hack//SAO vol.1 **剣闘牢獄 ～二人の双剣士～**

アシェーリト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack//SAO vol.1 剣闘牢獄〜二人の双剣士〜

【Nコード】

N8382V

【作者名】

アシェーリト

【あらすじ】

【ナーヴギア】と呼ばれるハードを用いる事により実現した【完全ダイブ（フルダイブ）】。これにより現実となんら変わり無い体験を出来るその技術を惜しげもなく利用したVRMMORPG【ソードアート・オンライン】のサービスが遂に始まる事となる。

誰もがまだ見ぬ冒険に夢を見た。——だが、希望は一転。絶望へと変わる。

ゲーム内での死⇨現実^{リアル}の死という現実、嘗て【世界】を救った少年が立ち上がる。

果たして彼等は、生きて現実^{リアル}へ帰る事は出来るのか……！？

・0（前書き）

衝動的に書いてしまいました。

ポーンッ——

新たな階層に至るためボスと熾烈な戦いを繰り広げていた彼等。今回もまた、多くの犠牲を出してしまった……。それでも、生きてこの【世界】から脱出する為にも、彼等は闘い続けなければならぬ。

その中の一人。赤い服を着た少年が開かれた新境地へといざ足を踏み入れようとしたその時。彼の耳に聞き覚えのある——しかし、二度と”聞いてはならない”八長調ラ音が鳴り響く。

——まさか、ありえない。

信じられない、いや。信じたく無いと思いこむ彼の耳に、再び音が響く。今度はその場に居た全ての人々の耳に入った。これまでになかった状況に戸惑う彼等を他所に、事態は急激に加速し始める。

——【世界】にノイズが奔る。

巨大な地響きと共に【世界】は震え、崩れて行く。誰もが事態を飲み込めないまま、【世界】は変貌を遂げる。

其処は、まるで荒れ果てた城跡。地面は敷き詰められた石で出来ており、辺りには嘗ては栄華を極めたであろう崩れた建物が立ち並ぶ。そして、暗く黒い、禍々しい——空。

この光景に、その場に居た誰もが言葉を失う。そう、先ほどまで自分達は【巨大な石の城の一室】にいたのだ。そこからは決して空を見ることなど叶わないと言うのに——。

それだけでは無い。このようなステージは、未だ嘗て存在しなかったのだから。

赤い少年は一人、震える心を奮い立たせる。

——忘れもしない。此処は嘗て、彼が【親友^{とも}】を失った場所。そして、【全て】が始まった場所なのだから。後ろ腰に装備している双剣を鞘から走らせ、逆手に構えて勢い良く後ろへ振り返る。彼等から大きく距離を取った場所に、【それ】はいた。

そこにいたのは、白い体躯をした巨人。僅かに宙に浮かぶ巨人、手に持つは真紅の十字架。全ての命を刈り取るべくある、死神の鎌。彼の者は、【波】。忌まわしき【波】。8つある【波】のどれよりも早く駆け抜け、そして”死”を撒き散らすもの。

彼の者の名は——【死の恐怖】

・0（後書き）

感想・指摘等をお待ちしております。

・ i 【閉ざされし 剣闘の 牢獄】（前書き）

オリジナルモンスターが出たりしますが、殆ど原作のモンスターを捻っているだけです。

時代設定とかも原作とは異なりますので、近いうちに設定を公開します。

・ i 【閉ざされし 剣闘の 牢獄】

「これは、ゲームであつても遊びではない」

—— 『ソードアート・オンライン』 プログラマー・茅場晶彦

「ふっ……！」

短い息遣いと共に、僕は袈裟懸けに剣を振るう。鈍い閃きを奔らせた剣は、吸い込まれるように敵を斬りつける。しかし踏み込みが

浅かったのか、敵にさしたる傷を負わせることは出来なかった。

目の前の敵——レベル76のモンスター【リザードマンウォーリアー】は一瞬苦悶の声を上げ、僅かに距離を取る。だが戦意は衰えておらず、寧ろ先ほどの攻撃でその怒りがかってしまったかのようにさえ見える。

それほどまでに目の前のモンスターはリアルに見え、そしてリアルな死のイメージを僕に与えてくる。早鐘のように暴れる心臓。背筋を襲う冷たい感覚。この感覚を感じるたびに、僕は”あの頃”を思い出し——そして”あの頃より”も恐怖を感じた。

全く嬉しく無い懐かしいこの感覚を日常的に感じるようになってから、既に2年近くが経過している。流石にこれだけの時間が経つと、”片手剣”の扱いにも慣れてくるものだ。

今正に”死の恐怖”が目の前に迫ってきているというのにこんなことを考えるなんて……。慣れとは恐ろしいものである（もっとも完全に恐怖を感じないわけでは無いし、この恐怖を楽しむわけではないのだけれど）。

「ガアアアッ！」

耳を劈くような咆哮をあげ、【リザードマンウォーリアー】はシミターを振り上げ突進してくる。スキルではないがレベル上のステータスが高いために、その速度は馬鹿にならない。

立て続けに繰り出される剣閃をかわし、或いは弾き返すことで防御する。直接のダメージは受けなくとも、ダメージ判定によって削られるHPバー。この一連の流れだけでも、僕の神経をすり減らしてく。本当に極僅かではあっても、少しずつ、しかし確実に僕は”死”に近づいていく。

だからこそ、一瞬の隙を見逃すわけにはいかない。

「——はあ！」

大きく空を斬った敵の剣。その隙を付いてその体目掛けて一撃、二撃と追撃を入れる。連撃により大きく体勢を崩した「リザードマンウォーリアー」目掛けて、駄目押しの「バーチカル・スクエア」が炸裂する。

残り半分を切っていた「リザードマンウォーリアー」は、断末魔の叫び声を上げ、その体を四散させて消滅した。

周囲を警戒しつつどうやら近くにモンスターはいないらしい——僕は腹の底から重苦しい安堵の溜め息を吐いた。

hack / S A O vol . 1 剣闘牢獄〜二人の双剣士〜
i 【閉ざされし 剣闘の 牢獄】

——あの日、世界は一新した。

「ここが、正式稼動したS A O………ソードアート・オンライン…… 凄いな」

当たり一面に広がる広大な草原のフィールドを見回し、純粹な思いが零れ落ちる。β版の時も十分に凄かったけれど……【完全ダイブ（フルダイブ）】の感覚はそれを遥かに凌ぐ。しかしこの技術の発展の裏には、大きな悲劇があったことも、隠しきれない事実だ。

20世紀末から2004年頃にかけて、インターネットの普及率

は大幅に上昇、これにより”情報の民営化”が始まった。しかしその弊害として、ネットを介しての犯罪は増加の一途を辿る事となる。だがそれでも特に大きな（世間的に見れば十分大きなものだが）事件は起こらず、ゆつくりと、しかし確実にネットワーク環境は成長を始める。その過程で特に発展したのが、ネットワークゲームだろ
う。

全国、或いは世界規模で繋がる事の出来るこのゲームは、多くの人々を魅了して止まなかった。これから更なる発展が望まれるだろうというまさにその時、世界を震撼させる事件が起きた。

【第一次ネットワーククライシス】だ。

2005年12月24日、【Pluto kiss（冥王のくちづけ）】と名づけられたこのウイルスにより世界規模でネットワークが停止した。約77分後にシステムを回復する事の出来たこの事件だが、世界に大きな爪痕を残すこととなる。このウイルスを作ったのが当時10歳の子供であったこと等から、ネットワーク犯罪に対する危険度は一気に上昇した。

この事件により、一時期ネットワークゲームも含め、多くのサービスの衰退が危ぶまれた。が、そこに一筋の光明がさした。

【Pluto kiss（冥王のくちづけ）】事件発生時、ALTIMIT社製作の同名OS【ALTIMIT】を搭載したコンピュータのみ、被害を免れる事が出来た。その有用性と信頼性からこのOSは世界中から認められ、普及して行く事となる。

やがてALTIMIT社の有志たちの一部が独立。サイバーコネクトCC社というゲーム会社を設立する。このCC社は次々とヒット商品売り出ししていくが、彼等の成長は止まらなかった。

当時ネットワーク関係の利用において主流となっていたのは、P
Cだけではなかった。

＜ヘッドマウントディスプレイ＞
【HMD】と呼ばれるゲームのコントローラーのようなこの機器の
利用度は幅広く、動画や電子書物の閲覧は勿論、ネットワークゲー
ムの利用にも一役買うこととなる。

これまでに無い臨場感を与える【HMD】はやがて更なる進化を
とげ、フェイスマウントディスプレイ【FMD】という更に小型化、高性能化したものとなった。
後にこの【FMD】などは、NERDLES技術を利用したマシ
ンの発展へと繋がることとなる。

それから時を経て、2016年にCC社は新たなネットワークゲ
ームのテスト版【fragment】というゲームを発表する。テ
ストプレイヤーの公募は僅かに1024人。しかしそのプレイ映像
が何処からか流失（CC社が正式版の利用者獲得の為に流したので
は無いかという噂も流れた）、惜しくもテストプレイヤーに選ばれ
なかった重度のネットゲーマー達を魅了した。

しかし【fragment】は、当初6ヶ月の稼動予定期間を3
ヶ月に大幅に減らし、幕を閉じることとなる。

そしてそれから約1年後の2017年12月24日、【Pluto
kiss（冥王のくちづけ）】からちょうど12年後に【fr
agment】の発展型として【The World】が正式に稼
動した。

【The World】の人気は凄まじく、更に約1年後の20
18年には既に全世界で2000万人のプレイヤーを獲得すること
となった。その間、様々な事が起こったが2021年、CC社本社
が炎上。サーバーがデータのサルベージ不可能な程の甚大な被害を
受ける。

こうして、全世界を虜にしたゲーム【The World】は呆

気なく終焉を向かえることとなる。

「それから更に約1年後の2022年11月6日、新しい物語が始まった、か——」

【FMD】をも超えるハード【ナウギア】による【完全ダイブ（フルダイブ）】により再現されたこの素晴らしい【世界】が出来るまでの簡単な経緯を思い返しつつ、僕は再び【世界】を見渡す。嘗て【The World】のプレイヤーだった僕にとって、こうした仮想の世界もまた、本物の【世界】であることには変わりがないと思っている。

「まあ、今は物思いにふけるよりも……この【世界】を楽しみますか！」

そう思い至った僕は、この【世界】を創った天才プログラマー”茅場晶彦”に感謝を。そして惜しくもこの【世界】を体感する事叶わなかった親友―”ヤスヒコ”に心の中で謝罪をしつつ、【世界】を楽しむ事にした。

——この時の僕は、まだ何も分かっていなかった。
”あの時”と同じ——いや。”あの時”以上の恐怖が待ち受け
ているだなんて……。

・ i 【閉ざされし 剣闘の 牢獄】（後書き）

感想・指摘等お待ちしております。

裏・1 「イカした アイツは 元勇者」(前書き)

所謂パロディモードってヤツです。

原作のあのバカっぽさを出せるように頑張ります。

裏：i 【イカした アイツは 元勇者】

「オペレーション『悩ましい腰つき』作戦、開始！！」
『アッフ~~~~ン』

——【The World】伝説の勇者とその仲間達

「ふっ……！」

短い息遣いと共に、俺は袈裟懸けに剣を振るう。鈍い閃きを奔らせた剣は、吸い込まれるように敵を斬りつける。しかし踏み込みが浅かったのか、敵にさしたる傷を負わせることは出来なかった。

目の前の敵ーレベル76のモンスター「リザードマンウォーリアー」は一瞬苦悶の声を上げ、僅かに距離を取る。だが戦意は衰えておらず、寧ろ先ほどの攻撃でその怒りがかってしまったかのように

さえ見える。

それほどまでに目の前のモンスターはリアルに見え、そしてリアルな死のイメージを俺に与えてくる。早鐘のように暴れる心臓。背筋を襲う冷たい感覚。この感覚を感じるたびに、俺は”あの頃”を思い出し——そして”あの頃より”も快感を感じた。

狂喜乱舞するほど懐かしいこの感覚を日常的に感じるようになってから、既に2年近くが経過している。流石にこれだけの時間が経つと、”片手剣”の扱いにも慣れてくるものだ。

今正に”死の恐怖”が目の前に迫ってきているというのにこんなことを考えるなんて……流石は俺だな。”伝説の勇者”の名は伊達じゃないってね。

「ガアアアツ！」

耳を劈くような咆哮をあげ、【リザードマンウォーリアー】はシミターを振り上げ突進してくる。スキルではないがレベル上のステータスが高いために、その速度は馬鹿にならない。まあ実際はそうでもないんだけどな。俺くらいの戦士にとっちゃあ、この程度日常茶飯事さ。

立て続けに繰り出される剣閃をかわし、或いは弾き返すことで防御する。直接のダメージは受けなくとも、ダメージ判定によって削られるHPバー。この一連の流れだけでも、俺の神経をすり減らしてく。本当に極僅かではあっても、少しずつ、しかし確実に俺は”死”に近づいていく。

……野郎。雑魚の分際でこの俺に傷をつけやがったな。

「——息くせえんだよっ！」

大きく空を斬った敵の剣。その隙を付いてその体目掛けて一撃、二撃と追撃を入れる。連撃により大きく体勢を崩した【リザードマンウォーリアー】目掛けて、駄目押しの【バーチカル・スクエア】が炸裂する。

残り半分を切っていた【リザードマンウォーリアー】は、断末魔の叫び声を上げ、その体を四散させて消滅した。

周囲を警戒しつつ―どうやら近くにモンスターはいないらしい―俺は腹の底から大声を上げて笑う。一頻り笑った俺は、さっきの雑魚―トカゲでいいや。まあそのトカゲのいた場所を見て不敵に笑う。

「へっ……。俺の剣もまだまだ錆付いてはいねえみたいだな」

粗方モンスターを狩り尽くした俺は、意気揚々と【街】へと戻る事とした。

・hackノSAO vol.1 剣闘牢獄―二人の双剣士―
パロディモード

裏・1 イカしたアイツは元勇者

——あの日、俺はこの上無い優越感に浸っていた。

「ここが、正式稼動したS A O……ソードアート・オンライン。
おうおう。俺の新しい伝説が始まるのには、中々良い場所じゃねえ
か」

当たり一面に広がる広大な草原のフィールドを見回し、純粋な思
いが零れ落ちる。β版の時も十分に凄かったけれど……【完全ダイ

ブ（フルダイブ）」の感覚はそれを遥かに凌ぐ。しかしこの技術の発展の裏には、大きな悲劇があったことも、隠しきれ無い事実だ。

ま！俺には関係無いんだけどね！

20世紀末頃から……まあ色々あったんだよ。

で。今はこんだけスゲーゲームが出来てるってわけだ。正に俺の為に出来たゲームといって間違い無いね。

【FMD】をも超えるハード【ナーブギア】による【完全ダイブ（フルダイブ）】により再現されたこの素晴らしい【世界】が出来るまでの簡単な経緯を思い返しつつ、俺は再び【世界】を見渡す。嘗て【The World】のプレイヤーだった俺にとって、こうした仮想の世界もまた、本物の【世界】であることには変わりがないと思っている。

「まあ、今は物思いにふけるよりも……この【世界】を楽しめますか！」

そう思い至った俺は、この【世界】を創った天才プログラマー”茅場晶彦”に感謝を（もし現実で会う事が出来たその時は、礼の一つくらいは言ってるか）。そして惜しくもこの【世界】を体感する事叶わなかった親友”足くさいバカ”に「ザマアwww」と思いつつ（心の中で謝罪をしつつ）、【世界】を楽しむ事にした。

——この時の俺は、まだ何も解っていなかった……。

……まあ、そういふこと。

裏・1 「イカした アイツは 元勇者」(後書き)

感想・指摘等お待ちしております。

・ 2 【訪れし 現実との 乖離】（前書き）

まだまだ最初のほうです。
頑張っていきます。

・2 【訪れし 現実との 乖離】

「そうやってじろじろ見んのはマナー違反。ゲームの中でもリアルでも一緒だよ？分かった？」

——『h a c e r s』副リーダー・ブラックローズ

「ぶぎー！」

という断末魔の叫び声と共に、青イノシシーレベル1モンスター【フレンジーボア】は、ガラスの砕けるような音をならして四散した。僕はβ版との差が殆どない事、腕が鈍っていない事の確認をしていた。結果は良好。寧ろβ版の時よりも動きが良くなった感じがさえる。バグ取りなどによって処理も向上したお陰なんだろう。

手を開いたり閉じたりを繰り返していた僕——朝倉魁人こと【カイト】——は、ふと空を仰ぎ見る。

・hack / S A O vol . 1 剣闘牢獄〜二人の双剣士〜
・2 【訪れし 現実との 乖離】

ソードアート・オンライン

S A O ――。それがこのゲームの名前だ。

量子物理学者にして天才ゲームデザイナーと名高い男性【茅場晶彦】
が手がけたこの【世界】は、素晴らしいの一言に限る。

だが、何よりもこの【世界】を素晴らしいと感じることが出来る
のは、彼が手がけたもう一つの発明【ナーヴギア】の存在無くして
成立しなかっただろう。

簡単にいってしまえば、このハードの内側には無数の信号素子が
埋め込まれており、そこから発生した電気信号を目や耳といった感
覚器ではなく、脳に直接伝える事で仮想空間を形成する。しかも、
ゲーム内での行動が現実の肉体に反映されないようにもなっている。
つまり、仮想世界内で走り回っても、現実の肉体は絶対に動く事は

ない。

これにより、プレイヤーは正にゲームの【世界】へ【入る（ダイブ）】する事が可能となったのだ。誰もが一度は夢に見るだろう、物語の世界へと入ること。それを遂に実現させたゲームとして、このSAOは途轍もない人気を呼んだ。だが、人気の要因は他にもある。

このSAOでは、従来のゲームにあった【魔法】という要素を殆どなくしている。その代わりに、【剣技】ソートスキルという必殺技のようなものがあり、プレイヤー達は己の武器一つで戦って行く事になる。

更には、服飾、鍛冶なども出来るため、文字通りプレイヤーはこの【世界】で生活することが出来る。そしてなんといっても、物語の舞台の広大さだ。

このSAOにおける物語の舞台は、石と鉄でできた巨大な城――【浮遊城アインクラッド】。合計百層からなるこの城は、一つ一つの階層が広大な造りで、更にはモンスターは強力ときているため攻略が容易ではない。

何せ、二ヶ月に及ぶベータテスト時における最大攻略階層は僅か六階層。僕も最前線に立って攻略に乗り出していたから、その過酷さは理解している。まあ、だからこそ、やりごたえがあるんだけど。

これらの事から。そして、二年前まで全世界2000万人のプレイヤーを獲得していた超大規模ネットワークゲーム【The World】に代わる新たなゲームとして、その注目を集めきたというわけだ。

「やっぱり、【The World】時代のプレイヤーも結構いるんだろうなあ……」

再び草原を見渡しながらポツリと呟いた後、僕は自分の手を見つめる。

手には茶色のレザーグローブ。服装は全体的に赤を基調とした軽装で、同じ色のベレー帽のような帽子を被っている。

【The World】での思い入れが強かった、なんて言葉では済ませられない。まさしく僕にとって【半身】であるPCー【カイト】は、この世界におけるもう一人の僕なのだ。僕と同様、【The World】時代のキャラデザインを作った人も少なくないだろう。

ふと時間を見ると、時刻はあと少しで五時半を回るところ。……一度”落ちて”少し腹ごしらえでもして、それからもう一度ログインしよう。

「……ついでに”ヤスヒコ”にちょっと自慢でもしてやろうかな」

それもいいかもしれない。アイツは凄く悔しそうな顔をするだろうなあ。まあでも、少ししたらアイツにもプレイさせてやるのもい

いかもしれない。なんたってアイツには【The World】を紹介してもらったんだし。この位の恩返しをしてやるべきだろう。

「——ん？」

……一瞬、【世界】にノイズが奔ったような気がした。

「……まあ、気のせいかな。それに、回線が込み合っている事が原因かもしれないし」

その時の僕は、たいして気にする事もなかった。

—— 思えばこの時から既に、物語は始まっていたのかもしれない。

そう。 ” 命 ” を賭けた壮絶な物語

が——

「あれ？」

右手の人差し指と中指を揃え、下に振り下ろす。それが、この【世界】におけるメニューウィンドウの開き方だ。当然僕もマニュアルにしたがって指を振り下ろし、ウィンドウを開く。そこから【ログアウト】の項目を探して——手が止まった。

「【ログアウト】のボタンが……無い？」

そんなはずは無い。そう思いメニューを見直すが……やはり見当たらない。これも回線が込み合っていると、そういった事が原因なのかな？

「兎に角もう一度試すしかないよね」

メニューを一度閉じた後、再び開く。そしてメニューを確認する——が、やはり無い。どこにもログアウトのボタンが見当たらないのだ。

そんな馬鹿な事が！と叫びそうになった時、ふと思い至ることがあった。そう、それはほんの少し前の出来事で……。

「まさか……さっきのノイズはこの前兆だったのか？」

そこまで考えて、逆に僕は冷静になる事が出来た。つい二年前までは”こんな事”は日常茶飯事だったではないか。なら今僕がすべき事は取り乱すことでは無い。現状をしっかりと把握する必要がある。その為にもまずは……。

「……一度、【はじまりの街】へ戻ろう。無闇にフィールドを動き回るのは危険だ」

独り呟いた僕は、なんとなく振り返る。視線の先には、夕陽がまるで血の様な紅を辺り一面の草原に落としている。その美しくくも、何処か危険な香りを匂わせる光景はまるで、【The World】における【はじまりの街】とも言える場所——【水の都 マク・アヌ】を連想させた。

リンゴーン、リンゴーン――。

突如、鐘のような音が【世界】に響き渡る。夕陽に染まった景色に思わず見惚れていた僕は、ビクリと体を震わせた。

「なっ――！？」

そして時を同じくして、僕の体を青い柱状のエフェクトが包みこむ。この現象は、【The World】やベータテストの時に幾度となく体験した。これは”転送”^{テレポート}する時に発生するエフェクトだ。しかし、これはありえない。僕はまだアイテムを使ってもいないし、ましてやコマンドを唱えてさえいない。

――強制転送。

自分でも驚くくらい、あっさりとその言葉が出てきた。つまり、この”転送”は【何者か】による意志が働いているという事だ。し

かし誰が？一体何の為に？そもそもこんな事が出来るのは――。
そこまで考えたところで、遂に全身を青いエフェクトが覆いつく
し、僕の意識は一度そこで途絶えた。

ポーンッ――

（——はっ！？）

頭の中に直接響くような音に、僕の意識は覚醒する。

八長調ラ音。

ある意味で因縁深いこの音が鳴り響くときは、きまって”何か”が起こるときだ。急いで辺りを見渡すとそこは、上も下も分からないような一面の——白。

（ここはもしかして……っ！！）

何処か見覚えのあるこの光景。僕は背後に何かの存在を感じて勢い良く振り返り——目を見開いた。

（——ああ、君は……）

そこに居たのは純白の女神。嘗て僕が、僕達が救おうとして、救えなかった少女。そして、【世界】を救うために自らの命を差し出した聖女。

見るもの全てを魅了する美しい銀色の髪を持つ”彼女”は、僕を見つめフツと柔らかい笑みを浮かべる。

「今一度……貴方の力を貸していただきたいのです」

ついで、悲しそうに表情を歪めた彼女は、最後にあったときよりも少しだけ大人びた声でそう言った。力を貸してほしい。この言葉の”意味”を理解出来ないほど、僕も馬鹿では無い。しかし疑問は

残る。

（でも、どうして？アイツ等は君の”自己犠牲”によって、完全に【世界】に還ったはずじゃあ……？）

——そう。忘れもしない、あの戦いの記憶。僕達はあの時確かに、僕達にとってもう一つの【世界】を救うために命を賭けて戦った。その戦いの果ては——目の前の”彼女”の挺身によって幕を閉じた。そうだ。忘れられるはずもない。だって、彼女を”殺した”のは……他の誰でも無い僕なのだから。

そんな僕の言葉に、”彼女”はフルフルと首を振る。勿論、否定の意味を込めて、だ。

「確かに、私も母も含め、一度は【世界】に還りました。……でも、何者かが”彼等”の一部を引き上げた”のです」

——馬鹿な。”彼女”の言葉に言葉を失う。

僕達が、そして”彼女”が命を賭けて【世界】を救ったのに。これでは、なんの為に……！？

「ですが、その危険性から阻止しようと考えた者もいました」

どういうことだろう？”アイツ等”の危険性を知っていて、尚且つそれを阻止しようとした人物がいる……？

そこまで考えて、パチリとまるでパズルのピースが嵌る様な感覚を覚えた。

（じゃあ、まさか……CC社が火災にあったのって！）

あれは社員の誰かがやったっていいのか！？そしてそれはつまり、
”アイツ等”のデータをサルベージしようとしたのは他ならぬCC
社そのものという事になる。

だけど疑問はまだ残る。

”アイツ等”のデータをサルベージしようとしたCC社。謎の人物は、サルベージした”アイツ等”のデータを抹消しようとする火災を起こした。だというのに、”アイツ等”が現れる可能性があるという。これは一体どういうことだろう？せめて何か手がかりになるものは無いのだろうか？そう思い顔を上げ”彼女”を見つめた――
―その時。最悪の考えが頭を過ぎった。

サルベージされたデータ

それにより蘇ろうとする、”アイツ等”

それを伝えにきた――”彼女”。そう。既に【世界】そのものとなったといってもいいはずの”彼女”が【SAO】^{ここ}にいる
それはつまり――

「アイツ等」が……この【世界】にいる……!？」

——絶望が、体を支配する。

■ 純白の女神 ■

俯く彼を見て、私の”心”は悲鳴を上げそうになる。

私はまた、彼を残酷な運命に引き入れようとしている。一度目は友達を救うために。二度目は【世界】を救うために。そして三度目は——私達を【世界】に還すために。

彼は歩き続けた。途中で挫折そうになった事もあった。立ち止まってしまうこともあった。それでも、彼は歩き続けた。自分が関わった事に目を背けず、最後まで。

そんな彼だから。駄目だと分かっている。これ以上巻き込んではいけないと理解していても。それでも、どうしても、頼りたくなってしまう。

でもきつと、彼ならば……。だって、ほら。

（―――教えて）

―――俯いた顔を上げる。

（―――僕は、どうすればいいのかを）

彼の瞳にはあの時と同じ強い決意が宿っているのだから―――

■ 純白の女神 S i d e O u t ■

・2 【訪れし 現実との 乖離】（後書き）

感想・指摘等お待ちしております。

裏・2 【歯止めなき 勇者と女神の 会話飛球】（前書き）

飛球Ⅱ ドツヂボール

タイトルの意味は分かったかな？

裏・2 【歯止めなき 勇者と女神の 会話飛球】

「あれ…俺…何で？もう一人の自分、素敵な自分。本当のパパとママはどこ？ああ、綺麗なお花畑が……。お嬢さああああああんっ！！（断末魔の叫び）」

——” 足くさいバカ” ・田中わび助

「ぶぎーっ！」

と泣き声を上げる青イノシシ——雑魚モンスターの……名前なんだっけ。まあイノシシでいいか——を足蹴にした俺は、HPがジワジワと減るように足で踏みつける。

ん？雑魚をいたぶって楽しいのかって？おいおい、勘違いしないでくれよ。これはあくまで俺の反応速度にシステムが追いついていないかを確認しているだけで、断じて俺の趣味じゃねえよ？ほんとだよ？

「ふんっ！」

「ぶぎゃっ！？」

頭を踏み抜かれて間抜けな叫び声を上げて絶命したイノシシを見やり、ふっと笑う。まあそこそこの俺の動きについてこれているみたいで安心したぜ。

俺は辺り一面の草原を見渡した後、空を仰ぎ見た。

・hack / SAO vol.1 剣闘牢獄〜二人の双剣士とパロディモード

裏・2 【歯止めなき 勇者と女神の 会話飛球】

ソードアート・オンライン
SAO——。それがこのゲームの名前だ。

創ったのは【茅場晶彦】っていう、巷じゃ天才と名高いゲームデザイナーらしい。コイツは滅多にメディアにでないらしい。……まあ、あれだろう。24時間365日部屋に引きこもってるデブだから、

人前に出るにでれ無いんだろうな。

まあ、そんなやつだろうと俺は気にしない。俺の目的の為に必要な部隊であるこの【世界】を創ったんだからな。それくらいはどうってこたあねえ。

ああ、そうそう。因みにこのSAOはだな、【ナーヴギア】っていうハードを使って【完全ダイブ（フルダイブ）】を体感出来るゲームなんだよ。ある意味じゃあ、自分がゲームに入り込むと考えていいだろうな。

しかしアイツも運がねえよなあ。この【世界】でなら本当の意味で”素敵な本当の自分”ってやつになれるかもしれないってのに……。ドンマイ！わび助！

ん？俺がこのゲームを始めた切欠は何かって？……ああ、それなんだがよあ。ちょいと訳ありでよ、話が長くなっちまうんだが……。まあ勘弁してくれ。

あれは——俺が中学二年生の終わりごろだったな。……突然蒸発しちまったんだよ、母さんが。で、その手がかりを探すために、人が多く集まる【The World】を利用して。それから色々あつてなあ。

バカのオルカはフラれたショックで昏睡状態になるわ。電波発信したり受信したりする奴等が大勢手下になるわ。俺の強すぎる力を恐れた所謂悪者が暴れだして危うく【世界】が崩壊しそうになるわでよあ……。

で。気付いたら勇者になってたって訳。

まあ最終的にはオル力のやつも失恋のショックから立ち直って意識を取り戻したし。俺は俺で失踪した母さんと再会することも出来た。でもそれだけじゃなかったんだ。

なんと、俺がまだガキの頃に旅に出ちまった流れ者の父さん、母さんが父さんよりも前に結婚していた男と、その男との間に”デキた”双子の姉妹とゲームの中であっちまったんだ！！

更に更に！なんと”足がくさいバカ”のオル力は父さんが家を出ている間に”デキた”女との間生まれた子供……つまり俺の異母兄弟だったんだ！！

あの時は流石の俺も心臓が止まるかとおもったぜ……。

でまあ、それから色々あって。

また母さんが蒸発しちゃった。

流石に肉親が消えてもらっちゃ俺としても放つてはおけねえからよ（主に生活費的な意味で）。で、【The World】の時間みたいにもしかしたら見つかるかなあ……って思って、このゲームを始めたんだよ。

俺はふと、後ろを振り返る。視線の先には、夕陽がまるで血の様な紅を辺り一面の草原に落としている。その美しくしくも、何処か危険な香りを匂わせる光景はまるで、【The World】における【はじまりの街】とも言える場所——【水の都 マク・アヌ】を連想させた。

「……へっ。夕陽が目にしみるぜ……」

リンゴーン、リンゴーン――。

「おおうつ!?!」

突如、鐘のような音が【世界】に響き渡る。夕陽に染まった景色に思わず見惚れていた俺は、ビクリと体を震わせた。

「な、なんじゃこりゃー……!?!」

そして時を同じくして、俺の体を青い柱状のエフェクトが包みこむ。この現象は、【The World】やベータテストの時に幾度となく体験した。これは”転送”^{テレポート}する時に発生するエフェクトだ。しかし、どういうこった。俺はまだアイテムを使ってもいないし、ましてやコマンドを唱えてさえないねえ。

——強制転送。

自分でも驚くくらい、あっさりとその言葉が出てきた。つまり、この”転送”は【何者か】による意志が働いているという事だ。しかし誰が？一体何の為に？そもそもこんな事が出来るのは——。そこまで考えたところで、遂に全身を青いエフェクトが覆いつくし、俺の意識は一度そこで途絶えた。

——寒いよお……。

（——はっ！？）

頭の中に直接響くような声に、俺の意識は覚醒する。今の声はい

っ
たい？

（誰だおまえは？）

すると俺の問いに答えるように、再び声が響いた。

「ガッツ石松——ではありません。

それと、具志堅ようじ——でもあり
ません」

「カイトは【黄昏の書】を手に入れた！」

（ふうん。あ、じゃあさ。携帯の番号教えてくれない？）

「携帯は持ってません」

（えー……。そういやこれってなに？ポエム集？）

「人に語れるほどのポエムはもちあわせてはいません。
貴方はたしか……” 足がくさいバカ” の友達？」

（よしてくれよ！あんなヤツと友達だなんて、恥ずかしくて外も歩
けやしねえこともねえな）

「反則技……。キャラクター一つで喜び、悲しみ、どちらにでもな
る」

なん……だと……？つまりそいつあ——。

「アイツ等が……” Uノザ ”…ゲフンゲフン！！敵が現れたのか！
？……へへ、腕が鳴るぜえ！！」

俺は、声高らかに笑った。

「おんどりゃあ。わいはまだ諦めとらんでえ………」

この時出会った白い少女。今度こそ間違いない。あの子は流れ者の父ちゃんが縁日で買ってくれた

—— ハムスターの【たみよ】なんだ!!

裏・2 【歯止めなき 勇者と女神の 会話飛球】（後書き）

書いていて思いました。

パロディモードの脚本をかいた人は天才だって……

感想・指摘等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8382v/>

.hack//SAO vol.1 剣闘牢獄～二人の双剣士～

2011年9月4日21時46分発行